奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

１９９２

奈良市教育委員会

目　次

柿経の考察—分類と編年について—

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．研究史……2
Ⅲ．出土・発見遺例……3
Ⅳ．分類……13
Ⅴ．編年……17
Ⅵ．おわりに……20

柿経の考察—分類と編年について—

松浦五輪美
原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

柿経とは、厚さ１㎜前後に薄く剝いだ細長い木の板（経木またはこけらという）に経文等を書写したものである。通常一枚の経木の一面に17字（表裏両面に書写する場合は34字）ずつの文字を書写し、20枚または40枚で一束とする。奉納・埋納されるときは、経典一巻数千枚を一巻にして束ねることもある。柿経の製作目的は、一つには死者への追善供養のためであるが、この他にも生前に後生安楽を願って逆修業として製作されたこともある。追善供養では一日で写経を完成させねばならない場合があるが、例えば法華経八巻すべてを写経すると、両面写経の柿経で約2000枚、片面写経ならその倍の枚数を必要とする。当然多人数で行うことになり、現存する一括の柿経にも実際筆跡の異なるものが認められる。そういった当時の写経体制を知るうえでも、柿経は良好な資料と言えよう。

では柿経が製作されていた時代はいつ頃であったのであろうか。現在最古の資料は京都府鳥羽離宮遺跡で出土したもので、12世紀後半のものと推定されている。[1] 紀年銘を有するものでは奈良県元興寺極楽坊天井裏発見の嘉禄元(1225)年銘のものが最も古い。[2] 文献史料では『百錬抄』第九、養和元（1181）年10月11日の条に「於レ院書二柿葉於心経千巻一供養。」と見られるのが柿経の初現と推定されている。最も新しい資料は、正徳元（1711）年の銘を持つ奈良県岩蔵寺毘沙門天像胎内発見のものである。[3] 従って柿経はおおよそ12世紀後半頃から少なくとも18世紀前半までは存続していたものと思われる。

ここで今回扱う資料について述べておきたい。これまであまり注目をされなかった遺物であったことが遠因か資料報告などでは柿経の扱いが統一されていない状況が見受けられる。特に笹塔婆との区別が不明確なものが多い。そもそも柿経は塔婆の一種に含められるものであるが、諸々の研究者が指摘するように、造塔の功徳と写経の功徳を合わせ修めるのが柿経の特徴である。その認識からするならば、柿経は経文を書写したものに限られ、たとえ材質が同じであっても、名号や真言のみ書写されたものとは区別するべきであると思われる。そこで論を進めるにあたって筆者が、柿経と認識するものを改めて定義しておきたいと思う。

- 墨書された文字は基本的に経文に限る。
- 法量の規定は厳密ではないが、概ね長さ50㎝、幅５㎝、厚さ２㎜を越えない。

以上の２点である。法量については、仮に条件を満たさずとも柿経製作の意図が明らかなものはこの限りではない。以下本文の記述は上記の条件にもとづくため、諸々の報告書で柿経とされているものでも今回取り上げなかった資料があることを断わっておきたい。

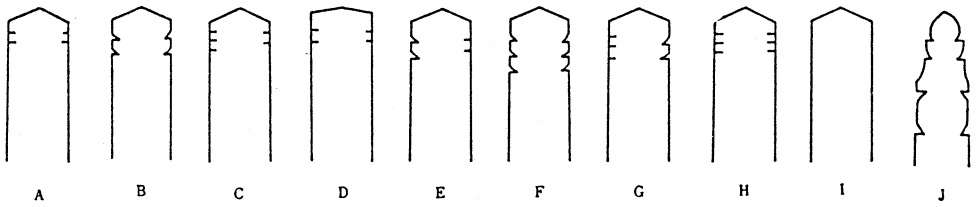
なお本稿を草するきっかけとなったのは、平成４年度に奈良市教育委員会が行った平城京左京三条三坊三坪の調査によって出土した、断片を含めての総数約１万点にのぼる柿経・笹塔婆である。その資料整理にあたって、柿経について知る機会を得、そして柿経研究の現状と同時にそこに残されたいくつかの問題点を認識した。本稿ではこのうち特に柿経の分類と編年について、各地の資料を比較検討することによって、考察してみたいと思う。

Ⅱ　研究史

柿経は仏教史学・仏教考古学・民俗学など多方面の分野から研究がなされている。柿経研究の先鞭を成した論巧は、1964年に発表された石田茂作氏の「元興寺極楽坊発見の柿経」である。[4] この中で、石田氏は元興寺極楽坊天井裏発見の柿経を中心に、柿経の発生とその意義・形態分類・書写方法・製作年代と納置法・遺例の紹介など柿経について多岐にわたる考察を展開している。1974年に発表された奥野義雄氏の「中世仏教信仰におけるこけら経の存在形態」では、仏教史学の分野から、柿経を含む写経形態とその体制の存在と変遷から、柿経の中世での在り方と、柿経醸成の主体者がいかなる社会的階級であったかを解明しようとしている。[5] 1975年に発表された柴田實氏らによる『日本仏教民俗基礎資料集成第六巻』では、柿経の定義・起源・書写経典・書写方法・分類・紀年銘資料や遺例の集成など多岐にわたっており、柿経の基礎的研究として高く評価される。[6] その後十数年、柿経についての論巧はあまり発表されていなかったが、最近では発掘調査による出土例が増加していることから、1991年に発表された藤澤典彦氏の「墓上祭祀の諸問題」[7] や戸澗幹夫氏の「加賀出土のこけら経」[8] では発掘調査による資料を用い、その出土状況などから、柿経の埋納場所や用途を明らかにしようとしている。

今回論じようとする柿経の遺例の集成は石田氏らによっても成されているが、最近の発掘調査の増加と比例して柿経の出土例も増加しており、ここでもう一度集成を試みる。

分類に関しては最初に石田氏が頭部形態に着目して①頂を三角に切っただけのもの②頂を三角に切り、板碑のように切り込みをつけたもの③脚の長い五輪塔形にしたものの３種類に分類している。『日本仏教民俗基礎資料集成　第六巻』でも頭部形態から図１に示すように10種類に分類している。しかしながら、いずれも形態分類を行ってはいるが、編年については論究していない。これは当時、紀年銘資料や発掘調査による良好な一括資料が少なかったことによるものであろう。ただ石田氏や『日本仏教民俗基礎資料集成　第六巻』



こけら経の頭部形態（本図は実物例より、やや誇張してある部分もある）

A圭頭状・左右に二本線の切込
B圭頭状・左右に二本線の深い切込
C圭頭状・左に三本、右に二本線の切込
D低い圭頭状・左右に二本線の切込
E圭頭状・左に深い二本線、右に二本線の切込
F圭頭状・左右に三本線の深い切込
G圭頭状・左に三本、右に二本線の深い切込
H圭頭状・左右に三本線の切込
I圭頭状のみわかり、左右の線は不明
J五輪塔状

図1　（注6より転載）

では柿経の手本となったとみられている二十行宛に切断して折本装に仕立てられた春日版『法華経』から類推して、両面写経から片面写経への移行が1450年を前後する頃と推定している。本論ではこうした先学の研究成果をふまえた上で検討を進めていく。

Ⅲ　出土・発見遺例

柿経は地域を問わず、全国に広まっていた風習と思われ、その出土・発見遺例も東北地方から九州地方にまで及んでいる。現在知りえる限りでは、出土例27、発見例20がある。

出土例

1．法界寺跡[9]（栃木県足利市樺崎町）

法界寺跡は鎌倉時代初期の寺院跡と推定されている。柿経は園池跡から２つの塊状になって出土した。総数約2000点。長さ25㎝前後、幅１㎝前後、厚さ２㎜前後で圭頭状。経文は法華経。片面写経。

2．白根山湯釜[10]（群馬県吾妻郡草津町湯釜）

出土の経緯は不明。白根山湯釜の硫黄堆積中より出土。経文は血盆経。両面写経。

3．粟崎町内[11]（石川県金沢市粟崎町）（図２－１、２）

現在大野川遺跡と仮称されている付近の河岸の拡幅工事中に地下約2.5ｍから、幅２尺、長さ３尺、高さ４尺の木箱に納められた状態で出土したと伝えられる。現在７点が残存している。長さ22㎝前後、幅１㎝前後、厚さ0.8㎜前後で圭頭状。経文は法華経。両面写経。

4．普正寺遺跡[12]（石川県金沢市普正寺町）

普正寺遺跡は、中世後期の港津集落跡である。柿経は15世紀中に埋まったと考えられる

旧河道の斜面から一括出土した。完形品はなく、幅1.5㎝前後、厚さ0.3㎜前後で圭頭状。経文は無量寿経もしくは観無量寿経と推定される。片面写経。

5．湯谷地内[13]（石川県能美郡寺井町湯谷）（図２－３、４）

明治40年の導水路工事中に地下８尺から、70～80点余りが出土したと伝える記録が残っている。完形品はなく、幅1.7㎝前後、厚さ0.3㎜前後で圭頭状。経文は法華経。片面写経。

6．清洲城下町遺跡[14]（愛知県西春日井郡清洲町）

清洲城下町遺跡は平安時代から江戸時代に至るまでの尾張の都市遺跡である。柿経は昭和59年度の調査で15世紀末から17世紀初頭のＬ字状の溝から漆器等と共に出土した断片が49点、昭和61年度の調査で池状の土坑より志野、織部焼などの陶磁器類と共に出土した破片１点と、昭和63年度の調査で16世紀後半以降の溝または池と考えられる遺構から出土したもの200点以上があり、昭和63年度出土のものは長さ30㎝以上、幅3.7㎝、厚さ1.0㎜で圭頭状。経文は昭和61年度のものが般若心経、昭和63年度のものが法華経。両者とも片面写経。

7．墨股廃寺[15]（岐阜県安八郡墨俣町）

遺跡の詳細は不明。大正15年頃発掘されたもの。完形品は無し。経文は法華経。

8．養老町蛇持[16]（岐阜県養老郡養老町）

蛇持字池の割にある池の底から陶器皿と共に出土。経文は大方等大集経及び華厳経。両面写経。

9．一乗谷朝倉氏遺跡[17]（福井県福井市城戸ノ内町）

一乗谷朝倉氏遺跡は15世紀後半から16世紀後半の、戦国大名朝倉氏五代にわたる城館・都市遺跡として著名である。柿経は昭和58年度の第46次調査でＣ地区の墓地跡から骨蔵器群と共に出土した。総数２万数千点。4000枚程度が一束となっており、束になったものが６本ある。頭部が腐蝕しているが、長さ約30㎝、幅２～３㎝。経文は法華経。片面写経。

10．浄琳寺遺跡[18]（滋賀県長浜市元浜町）（図２－５）

浄琳寺遺跡は鎌倉時代から江戸時代にかけての寺院跡である。柿経は立会調査の際に弥生土器、土師器皿、天目茶碗、宝篋院塔の一部と共に、腐植土層中からまとまって出土。完形だけでも1870点。長さ24㎝前後、幅2.5㎝前後、厚さ0.5㎜の圭頭状。経文は法華経。片面写経。

11．光明寺遺跡[19]（滋賀県野洲郡中主町大字西河原）（図２－６）

光明寺遺跡は平安時代中期から江戸時代にかけての集落遺跡である。柿経は方形の館跡の外堀南端に水を引く溝との合流点から14世紀末から16世紀初めの遺物と共に17点の断片が出土。復元できたものは６点。幅2.0㎝、厚さ0.3㎜の圭頭状。経文は法華経。片面写経。

12．鳥羽離宮遺跡[20]（京都府京都市伏見区竹田内畑町）

鳥羽離宮遺跡は平安時代後期の離宮跡として有名である。柿経は第124次調査区西端で検出された南北方向の堀状遺構の腐植土層中から12世紀後半の遺物と共に16点出土した。柿経は頭部に深い切れ込みをいれ、底部を尖らしている。写経方法は２種類あり一つは片面写経で、もう一つは一枚に同一文字を５回ずつ書いて、中央部に釘を打って束ね、数枚を合わせて経文とする特殊なものである。片面写経のものは長さ38.1㎝、幅1.6～2.0㎝、厚さ1.0～2.0㎜。同字写経のものは長さ29.4～30.6㎝、幅1.2～1.5㎝、厚さ0.5～2.0㎜。経文は法華経、無量義経、観普賢経。

13. 神倉山第三経塚[21]（和歌山県新宮市権現山）

神倉山第三経塚は熊野新宮経塚群のうちの一つである。柿経は断崖岩盤の隙間に納置された陶経筒内に銅鏡、青白磁合子、刀子、瑠璃小玉と共に納められていた。断片で出土している。

14. 元興寺極楽坊[22]（奈良県奈良市中院町）

元興寺極楽坊は奈良時代の元興寺の東室南階大房が鎌倉時代に改修されたもので、本堂と禅室から成り立っている。極楽坊における発掘調査は、防災工事に伴う小子房及び中世庶民信仰資料包蔵坑推定地の調査と、総合収蔵庫建設に伴う調査が行われている。柿経は前者の調査で土坑内より慶長八（1603）年銘の納骨五輪塔と共に10100点が出土し、後者の調査では池跡下底から16世紀初めから中頃までの銘を有する数点の板塔婆と共に束になって出土した。土坑内出土のものは長さ25㎝前後、幅1.5㎝前後、頭部は圭頭状、五輪塔状等がある。経文は両調査のものともに法華経、無量寿経、観普賢経など数種が認められ、片面写経と両面写経がある。紀年銘資料が出土しており、以下にその概要を記す。

嘉元四（1305）年銘[23] 小子房及び包蔵坑の調査出土

圭頭状を呈する。９点出土。両面写経で表裏に地蔵菩薩本願経巻下嘱累人天品第十三を墨書したあと、「地蔵菩薩本誓願　釈尊功利附属説　□□所明発信心　故更刻模伝未来□□□徳及法界　先救三途極重苦　人天獣離生死海　自他同獲菩薩化　嘉元四年　六月廿四日　願主南都興福寺僧　覚性」とある。これと全く同文の版刻の刊記をもつ経典が唐招提寺に残っており、これは覚性開版の地蔵菩薩本願経を手本に写経を行い、最後の余白に刊記まで書き添えたものと考えられる。従ってこの紀年銘は、柿経の製作年を記したものではないが上限が1305年以降のものであることがわかる。長さ25.0㎝、幅1.6㎝、厚さ0.5㎜。

明徳四（1393）年銘[24] 小子房及び包蔵坑の調査出土

頭部形五輪塔状を呈し、その部分に「 」の五大種字を墨書する。55点出土。両面写経で般若理趣経を墨書する。199行目の裏に「明徳四年三月十二日　金剛仏子頼□敬白」とある。長さ25.3㎝、幅1.4㎝、厚さ0.5㎜。

応永十五（1408）年銘[25] 小子房及び包蔵坑の調査出土

頭部形五輪塔状を呈する。表面に五大種字と「南無阿弥陀仏」を、裏面に五大種字と「南無地蔵菩薩 応永十五年二月五日」と墨書する。長さ16.7㎝、幅2.1㎝。

天正八（1580）年銘[26] 小子房及び包蔵坑の調査出土

頭部は欠損する。「為順 天正八年 筭良延房得業 二月廿一日祐政」と墨書する。残存長9.3㎝、幅2.8㎝、厚さ0.3㎜。

応永六（1399）年銘[27] 収蔵庫建設に伴う調査出土

圭頭状を呈する。両面写経で千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経を墨書する。52点発見のうちの１点の表面に「□大臣謀反病気流行水旱不調」と願文を、裏面に「□難者 □臣於年若為一切写五種大陀羅尼妙文願益 明永□ 善哉巻属 此懇志報彼広思矣応永六年十一月四日□」と墨書する。長さ24.7㎝、幅1.4㎝、厚さ0.5㎜。

天文（1532～1554）年銘[28] 収蔵庫建設に伴う調査出土

「天ヵ 文ヵ」と墨書する。

15. 興福寺旧境内[29]（奈良県奈良市登大路町）

興福寺主要伽藍の北側、賤院地区の発掘調査で15世紀代と考えられる井戸内から約290点が出土。完形品が多く、長さ21㎝前後のものと25㎝前後のものがあり、幅は1.5㎝前後、厚さは1.0㎜前後で圭頭状。経文は地蔵菩薩本願経。両面写経。

16. 八王子神社[30]（奈良県奈良市高畑町）

八王寺神社は、旧春日若宮神主である千鳥家の屋敷内にある春日造の一間社殿である。基壇積み替え作業中に懸仏等が発見されたため調査が行われた。柿経は鏡像、懸仏の間に挟まって出土した。総数約140点。完形品は無く、幅３㎝前後、厚さ0.2㎜で圭頭状。経文は地蔵菩薩本願経。片面写経。

17. 平城京左京三条二坊十五坪[31]（奈良県奈良市二条大路南一丁目）

柿経は中世以降の旧河川の氾濫砂層中から約9500点が出土。多くは断片であるが、完形のもので長さ28.2㎝、幅は３㎝前後、厚さは0.1㎜で圭頭状。経文は法華経、無量寿経などが認められる。片面写経と両面写経がある。

18. 平城京左京三条三坊三坪[32]（奈良県奈良市大宮町）（図２-７、８）

旧河川堆積層及び氾濫砂層中から約１万点が出土。多くは断片であるが、約300点は経文が判明している。前述した左京三条二坊十五坪の調査の氾濫砂層はここで検出した河川によるものと思われる。長さ30㎝前後、幅2.5㎝前後、厚さ0.3㎜程度で、頭部が圭頭状のものと五輪塔状のものがある。経文は法華経、無量義経、観普賢経などが認められる。法華経書写の柿経のなかには、経文が重複しているものがあることから、二束以上あることがわかる。片面写経と両面写経がある。

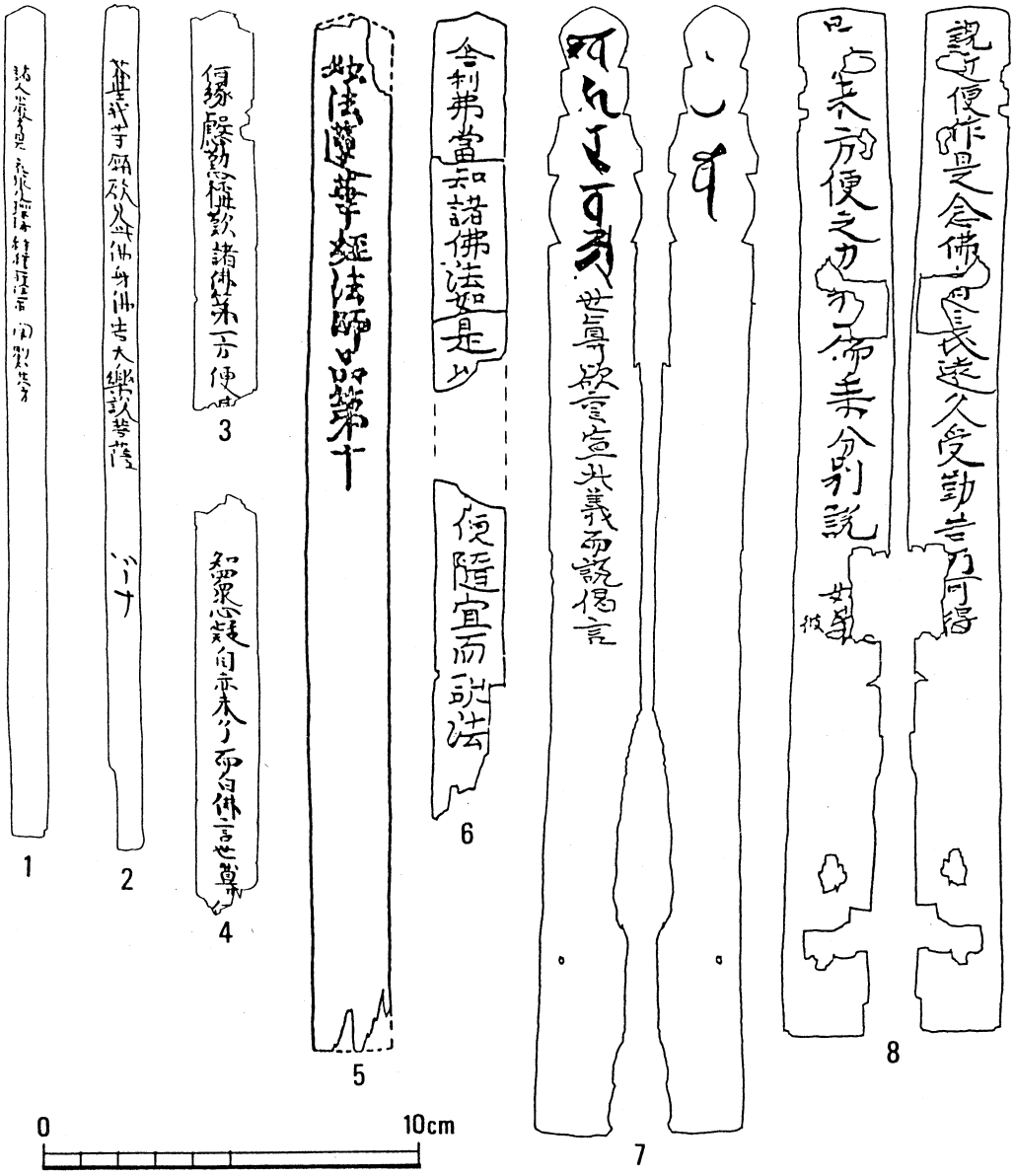


図２　各地の柿経(1)

１、２粟崎町内　３、４湯谷地内　５、浄琳寺遺跡　６、光明寺遺跡　７、８平城京左京三条三坊三坪
（１～４註11、５註18、６註19より転載）

19. 大阪城跡[33]（大阪府大阪市東区高麗橋一丁目）

柿経は昭和62年の船場の調査と平成３年の三ノ丸の調査の際に出土している。前者は17世紀前半の土坑から断片のみが、後者では江戸時代の盛土層から５点の完形品が出土した。長さ47～49㎝、幅4.7㎝、厚さ0.5㎜で圭頭状。経文は法華経。片面写経。

20. 勝山遺跡[34]（大阪府大阪市生野区勝山北三丁目）（図３－３）

勝山遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての遺物包蔵地である。東西方向の中世の溝か

ら瓦質羽釜、須恵器、埴輪等と共に１点出土した。長さ30.5㎝、幅3.1㎝、厚さ0.5㎜で圭頭状。経文は法華経。片面写経。

21. 五反島遺跡[35]（大阪府吹田市南吹田５丁目）

五反島遺跡は弥生時代から室町時代にかけての河道跡および祭祀遺跡である。柿経は平安時代から室町時代の河道跡から１点出土している。頭部・下端部を欠損している。幅1.3㎝、厚さ1.0㎜。経文は法華経。両面写経。この柿経は南北朝期に属するものと推定されている。

22. 高槻城跡[36]（大阪府高槻市野見町）（図３－１、２）

高槻城は文献資料から16世紀には存在していたことが知られる。廐郭地域の調査の際に、17世紀に埋められたと考えられる南堀跡から20点が束になって出土した。完形のもので長さ20.4㎝、幅2.0～2.4㎝、厚さ0.6～0.8㎜で圭頭状。経文は法華経。片面写経。

23. 上清滝遺跡[37]（大阪府四条畷市清滝）（図３－４）

上清滝遺跡は平安時代末から室町時代にかけての集落遺跡である。柿経は第２次調査の際に検出された旧河川斜面から、寿永三（1184）年の銘のある題籤軸と共に１点出土した。長さ27㎝前後、幅1.3～1.7㎝、厚さ1.0～3.0㎜。経文は法華経。

24. 書写坂本城跡[38]（兵庫県姫路市書写西坂本）

書写坂本城は室町時代に赤松氏の領国支配の拠点であった坂本城であるとされている。柿経は東堀の底から15世紀代の備前焼などと共に５点出土した。完形品はなく、厚さ1.0～2.0㎜。経文は法華経。片面写経。

25. 草戸千軒町遺跡[39]（広島県福山市草戸町）

草戸千軒町遺跡は鎌倉・室町時代を中心として平安時代から江戸時代にかけての集落遺跡として著名である。柿経は第32次調査の際に室町時代後半の池底から約10点と、第33次調査の際に室町時代から17世紀までの溝から２点および表土から１点出土している。いずれも完形品は無く、幅1.0～1.4㎝。経文は法華経。両面写経。

26. 井相田Ｃ遺跡[40]（福岡県福岡市博多区井相田二丁目）（図３－５～８）

井相田Ｃ遺跡は奈良時代から室町時代にかけての集落・水田遺跡である。池状遺構の埋土最下層から、長禄三（1459）年・寛正五（1464）年の年紀をもつ板塔婆とともに4200点出土した。法華経を書写するが、4200点出土のうちで経文が重複しているところがないことから、法華経八巻だけを書写した一つの束であることがわかる。柿経の年代は共伴した板塔婆などから15世紀中頃を下限とする。一束の柿経に両面写経と片面写経を併用していることから、この資料が両面写経から片両写経への移行期の形態を示すものとしてとらえられている。圭頭状片面写経のものは長さ22.0～34.7㎝、幅1.3～1.7㎝、厚さ0.3～1.0㎜。圭頭状両面写経のものは長さ22.0～35.1㎝、幅1.2～1.8㎝、厚さ0.3～1.0㎜。方頭状のものは長さ31.2～35.0㎝、幅1.4～1.8㎝、厚さ0.3～1.0㎜。

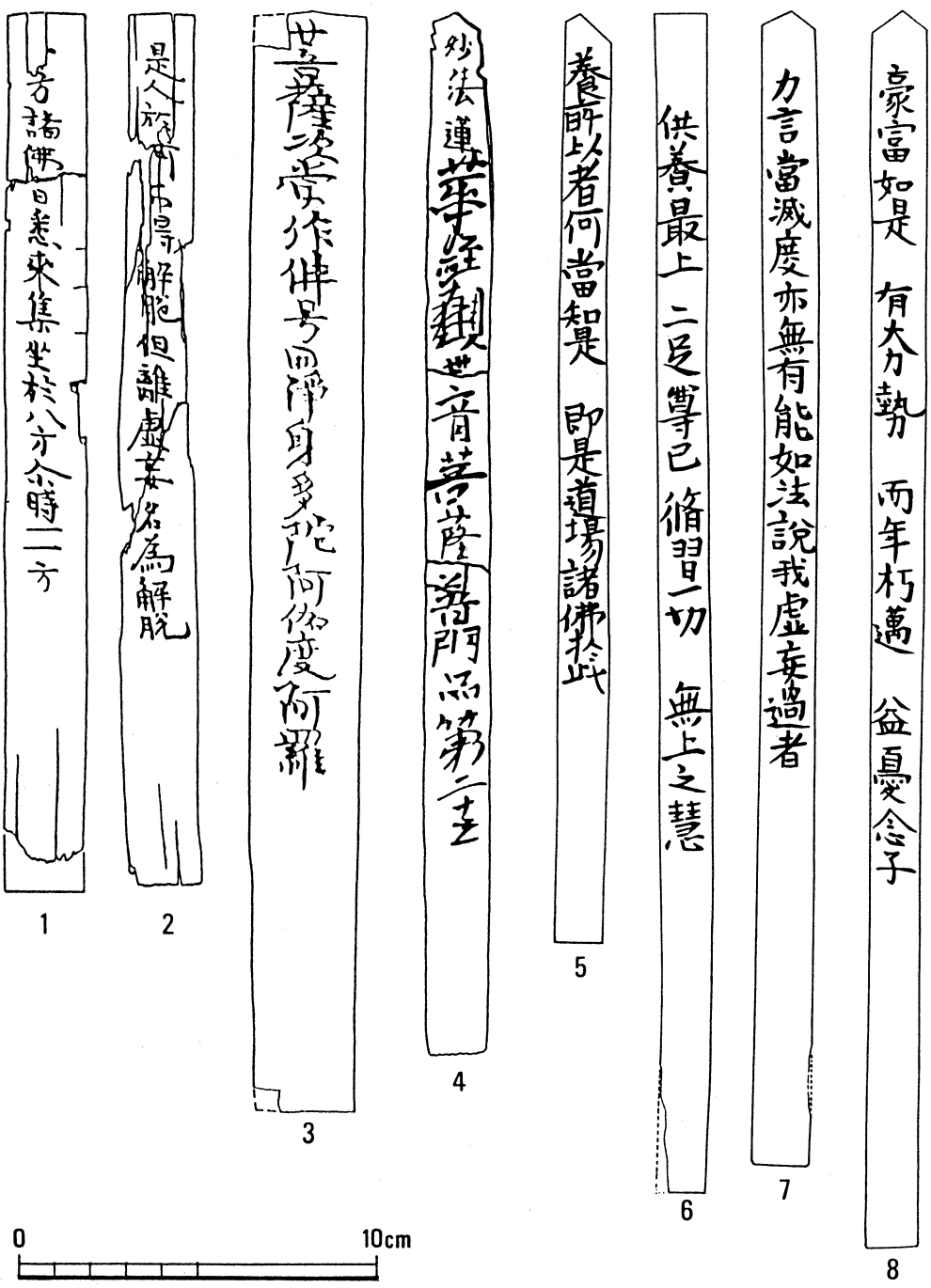


図3　各地の柿経(2)

1、2高槻城跡　3勝山遺跡　4上清滝遺跡　5～8井相田C遺跡
（1、2註30　3註28　4註31　5～8註34より転載）

27．大宰府史跡[41]（福岡県太宰府市大字観世音寺）

柿経は第109次調査で、正庁の東に位置する観世音寺の南門前面が調査された際に、南北溝から嘉元二（1304）年の銘をもつ卒塔婆と共に５点出土した。完形品は長さ17.5㎝、幅1.7㎝、厚さ1㎜以下で圭頭状。経文は法華経。両面写経。

発見例

１．立石寺[42]（山形県山形市大字山寺）

立石寺は円仁が開いた天台宗の寺院である。柿経は石窟内に俵に入れて奉納されていた。１万点以上。長さ23.0～28.0㎝、幅1.5～2.1㎝で圭頭状。経文は無量寿経、阿弥陀経などが認められる。片面写経と両面写経がある。

２．中尊寺[43]（岩手県磐井郡平泉町）

中尊寺は平安時代末期に藤原清衡によって創建された寺院である。柿経は金色堂須弥壇下、長押内、天井裏から発見された。経文は阿弥陀経などが認められる。

３．浄楽寺[44]（神奈川県横須賀市芦名）

浄楽寺は源頼朝が建立した勝長寿院をのちに北条政子が芦名に移したものと伝えられる。柿経は本尊の阿弥陀如来坐像内から発見された。総数128点。長さは26.1㎝。経文は不明であるが寛文五（1665）年の銘をもつものがある。

４．覚園寺[45]（神奈川県鎌倉市二階堂）

覚園寺は鎌倉時代に北条貞時によって創建された寺院である。柿経は関東大震災によって倒壊した開山塔の下から偶然発見された。圭頭状を呈し、経文は阿弥陀経を両面写経で書写する。正慶元（1332）年銘をもつものがあり、柿経余白に「正慶元年十一月廿四日円信□阿二丁」、「正慶元年十一月十八日比丘尼道阿聖霊往生極楽為也敬白孝子法橋円信花押」と願文を墨書する。厚さ0.4㎜。

５．石川県内某寺[46]（石川県能美郡）

柿経は寺に伝世品として所蔵されていた。長さ24.8㎝、幅1.3㎝、厚さ0.45㎜で圭頭状。経文は法華経。両面写経。

６．愛知県佐屋町[47]（愛知県海部郡佐屋町）

詳細は不明。経文は法華経。片面写経。

７．石山寺[48]（滋賀県大津市石山寺辺町）

石山寺は真言宗の寺院で、現在の本堂は再建されたものである。柿経は平安時代の僧淳祐の座像胎内から発見された。32点発見のうちの１点に明徳四（1393）年銘をもつものがある。長さ15.6～30.8㎝。

８．元興寺極楽坊[49]（奈良県奈良市中院町）

柿経は本堂解体修理の際に約27000点が天井裏から発見された。出土資料と合わせると

元興寺には37463点の柿経が所蔵されていると報告されている。長さ25㎝前後、幅1.0～1.5㎝、厚さ0.5～1.0㎜で圭頭状のものが多い。経文は法華経をはじめ20種に及ぶ。片面写経と両面写経がある。紀年銘を有するものがあり、以下にその概要を記す。

嘉禄元（1225）年銘

圭頭状を呈する。１点発見。両面写経で表面に法華経巻八普賢菩薩勧発品第二十八の86行目を、裏面に「嘉禄元年丙午南無阿弥陀仏」と墨書する。ややささくれた感じが、割り材であることをうかがわせる。残存長13.5㎝、幅1.0㎝、厚さ0.5㎜。

応永六（1399）年銘

１点発見。表面に「□供養得如是利益佛言」、裏面に「□応永六年五月廿二日　静七七敬白」と墨書する。残存長22.7㎝、幅1.3㎝、厚さ0.5㎜。

天文八（1539）年銘

片面写経である。断片であるが、左下に「天文八年六月廿五日」とある。残存長9.4㎝、残存幅1.9㎝、厚さ0.4㎜。

９．東大寺[50]（奈良県奈良市雑司町）

柿経は南大門の金剛力士像（阿形）胎内と南大門の獅子像胎内から発見された。前者は断片のみ。後者は長さ25.8㎝、幅1.5㎝で経文は両面写経で法華経を書写する。後者には応永二十七（1420）年銘をもつものがあり、「□通知応永廿七年□」と墨書する。長さ25.8㎝、幅1.5㎝。

10．西大寺奥院骨堂[51]（奈良県奈良市西大寺芝町）

柿経は骨堂内に納入されていたものである。1400点以上発見。長さ31.8㎝、幅4.0㎝のものと長さ36.9㎝、幅3.8㎝の二種類がある。経文は法華経と開結二経。両者とも圭頭状。片面写経。元禄十三（1700）年銘をもつものがあり、「為露白童子菩提之元禄十三年十月廿八日　敬白　施主英芳」と墨書する。長さ36.9㎝、幅3.8㎝。

11．不退寺[52]（奈良県奈良市法蓮東垣内町）

不退寺は平城上皇の離宮を在原業平が不退転法輪寺としたと伝えられる寺院である。柿経は本堂解体修理の際に天井裏から発見された。総数6389点。長さ28㎝前後、幅1.5㎝前後、厚さ1.0㎜前後のものと長さ33㎝前後、幅3.5㎝前後、厚さ0.5㎜前後の二種類がある。両者とも圭頭状。経文は法華経、無量義経、観普賢経などが認められる。幅の細いものは両面写経、広いものは片面写経。柿経束の側面に紀年銘を墨書したものが二束ある。以下にその概要を記す。

正保三（1646）年銘

圭頭状を呈する。片面写経で法華経を墨書する。経束の側面に「正保三年八月九日　敬白」と墨書する。長さ33.0㎝、幅3.2㎝、厚さ0.4㎜。

慶安二（1649）年銘

圭頭状を呈する。片面写経で法華経を墨書する。経束の側面に「一乗妙典　開結心阿回向経等　右意趣者　為奉祈往生　極楽頓証　菩提也乃至　法界平等利益　慶安二年四月□日　逆修妙性」と墨書する。長さ36.0㎝、幅3.5㎝、厚さ0.35㎜。

12. 円成寺[53]（奈良県奈良市忍辱山町）

円成寺はもと忍辱施寺といい聖武天皇の発願により創建されたものであったが、1466年に焼失した。現在のものは京都鹿ヶ谷にあった円成寺を移した寺院である。柿経は本堂解体修理の際に発見された。41点。長さ35㎝、幅5.5㎝、厚さ0.2㎜で短冊状。経文は法華経。片面写経。

13. 松尾寺[54]（奈良県大和郡山市山田町松尾）

松尾寺は法隆寺別院として開かれたと伝えられる寺院であるが、現在の本堂は1337年に再建されたものである。柿経は本堂修理の際に床下から発見されたと伝えられるものである。146点。長さ24.9㎝、幅1.5㎝前後、厚さ1.0㎜前後で圭頭状。永正十三（1516）年銘をもつものがあり、両面写経で法華経を墨書する。

14. 岩蔵寺[55]（奈良県生駒市南田原町）

岩蔵寺は最澄が堂を建立したと伝えられる寺院である。柿経は本尊である毘沙門天立像胎内に２つの束にして納入されていた。長さ29.6㎝、幅5.8㎝、厚さ1㎜以下で長方形の短冊状。経文は毘沙門天王功徳経。正徳元（1711）年銘をもつものがある。短冊状、片面写経で毘沙門天王功徳経を書写する。長さ29.6㎝、幅5.8㎝。

15. 大御輪寺[56]（奈良県桜井市三輪町）

大御輪寺は大神神社の神宮寺であったが、廃仏棄釈によって廃寺となった。柿経は廃寺となった際に堂内から持ち出されたものである。幅1.3㎝で圭頭状。経文は法華経、梵網経。

16. 当麻寺[57]（奈良県北葛城郡当麻町）

当麻寺は、一説には河内の万法蔵院を681年に移したものと伝えられる寺院である。柿経は本堂解体修理の際に本堂正面内法長押北つし二階から発見された。91点。長さ26.4㎝、幅1.7㎝、厚さ1.0㎜前後で圭頭状。経文は称讃浄土摂受経。両面写経。

17. 室生寺[58]（奈良県宇陀郡室生村）

室生寺は、８世紀末に興福寺の僧賢璟が創建した寺院である。柿経は弥勒堂修理の際に須弥壇下の木箱から籾塔と共に発見されたもの。３点。全て断片。

18. 金峰山寺[59]（奈良県吉野郡吉野町）

金峰山寺の創建に関しては諸説あるが、蔵王堂は1445年に再建されたものである。柿経は室町時代建立の二王門内にある二王像胎内から発見されたと伝えられるものである。約3000点以上が一束になったものと、束になっていないものが2000点以上ある。長さ25㎝前

後、幅1.0～1.5cm、厚さ0.5～1.0mmのものが多い。頭部は圭頭状と五輪塔状がある。経文は法華経、般若理趣経。片面写経と両面写経がある。

19. 慈眼院[60]（大阪府泉佐野市日根野）

慈眼院はもと日根野神社の神宮寺であった寺院である。柿経は本堂天井裏から発見された。一束に整巻されている。長さ25.0cm。経文は法華経。両面写経。

20. 金山寺[61]（岡山県岡山市金山寺）

金山寺は奈良時代後半に報恩大師によって創建された寺院である。文献資料によると、たびたび炎上し、1575年から復興したことが知られる。柿経は五重塔須弥壇下から発見された。経文は法華経。両面写経。

以上の他にも柿経が出土もしくは発見されたと伝えられる場所が若干あるが、資料自体はもとより、その詳細が明らかでないため割愛した。

Ⅳ　分類

各地で出土及び発見された柿経は、長さ・幅・厚さだけでなく、形態や写経方法も異なっているものが認められる。ここでは資料解釈および編年作業の前段階として、形態と写経方法について分類を行う。

1　形態分類

柿経の形態的特徴として第一にあげられるのが、頭部の形状である。この分類に関しては、先述のように既に元興寺極楽坊発見の資料を基に試みられたものがあるが、繁雑さを避けるため、ここでは現存の資料に認められるものを大きく以下の４種類に分類した。

- 山形に作り出した圭頭状のもの。先端の角度は一定ではなく、ほとんど直線に近いものも認められる。（図４－１）
- 圭頭状であるが、両側に切込みが入るもの。切込みのパターンは数種類認められ、単に切れ目のみ入っているものもある。（図４－２）
- 方形に作り出した方頭状のもの。（図４－３）
- 五輪塔状に形作られたもの。地輪部がそのまま写経部分へと続く。（図４－４）

次に下端部の形状についてみると、現存するものでは２種類認められる。

- 端部が方形のもの。（図４－５）
- 端部を鋭く尖らせたもの。（図４－６）

以上の２部位の分類とは視点が異なるが、柿経全体の法量によって次のように大きく２種類に分類することが可能である。

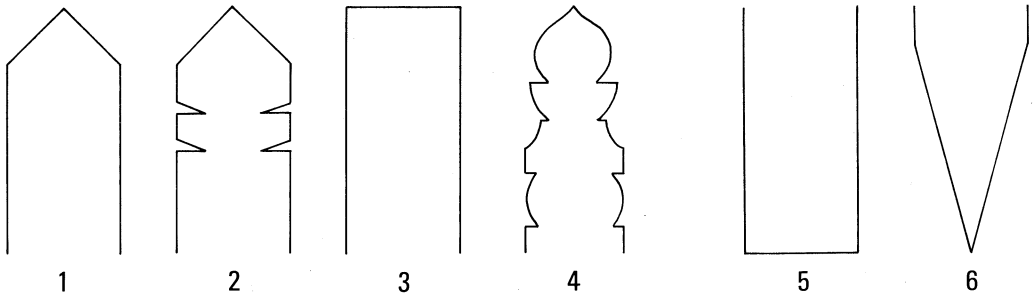


図４　柿経の頭部・下端部形態分類図

• 幅が１～1.5㎝程度、厚さが１㎜程度の細身でやや厚手のもの。

• 幅が３㎝程度から５㎝程度、厚さ0.5㎜以下の幅広で薄手のもの。

この２者は経木の製作技法の違いからくるものと思われる。

以上の形態は全ての組合せが存在するのではなく、各地で見られる柿経の形態は次の７類型にまとめることができる。（図５）

Ⅰ類：圭頭状で、方形の下端部を持つ細身のもの。

Ⅱ類：圭頭状で、方形の下端部を持つ幅広のもの。

Ⅲ類：圭頭状かつ、切込みの入る頭部で、方形の下端部を持つ細身のもの。

Ⅳ類：圭頭状かつ、切込みの入る頭部で、下端部を尖らせた細身のもの。

Ⅴ類：頭部、下端部とも方形の細身のもの。

Ⅵ類：頭部、下端部とも方形の幅広のもの。

Ⅶ類：五輪塔状の頭部で、方形の下端部をもつやや幅広のもの。

２　写経方法

柿経の写経方法は基本的には経文を片面に書くものと、両面に書くものとがある。なかには経文以外の文字のみ裏面に書写する場合も認められる。現存する資料には以下の３種類の方法がある。

ａ類：片面にのみ書写するもの。梵字や年号のみが裏面にも書かれているものも基本的にはこれに属する。

ｂ類：両面に書写するもの。一枚ずつ裏返して書くものと、一束分をまとめてから裏返して書くものとがある。

ｃ類：一枚に同じ文字だけを数回書写し、数枚を合わせて一つの経文とするもの。

以上の形態と写経方法はそれぞれ複合するものであり、両者を合わせて類型を表記していきたいと思う。（例：圭頭、方形の下端部、細身の形態で片面写経のもの―Ⅰａ類）

ただし現存の資料では写経方法が１種類しか認められない形態もある。実際の資料を見てみると、Ⅰａ類、Ⅰｂ類が元興寺極楽坊など、Ⅱａ類が不退寺など、Ⅲｂ類が元興寺極

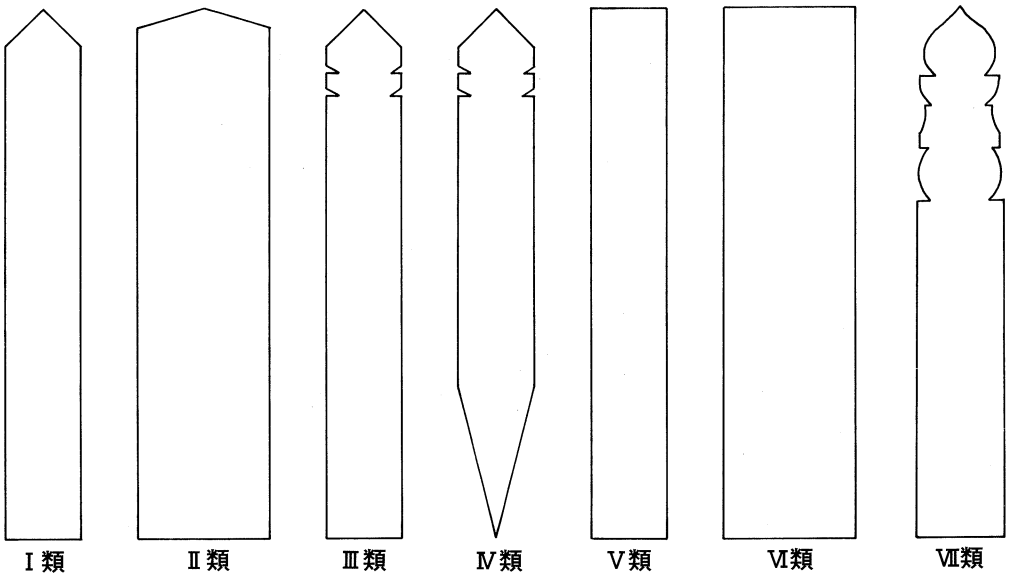


図５　柿経の形態分類

楽坊など、Ⅳa類、Ⅳc類が鳥羽離宮跡、Ⅴb類が井相田遺跡など、Ⅵa類が岩蔵寺など、Ⅶa類が平城京跡、Ⅶb類が元興寺極楽坊などで出土または発見されている（表１・２）。

凡　例

- 表中の「遺構の推定年代」は柿経の出土した遺構もしくは柿経自体について報告されている年代である。
- 「類型」はⅣ章で行った分類に基づく。写経方法しか判断できない資料はアルファベットのみを記した。

表１　柿経出土地一覧

番号	遺跡名または地名	所在地	出土場所	出土点数	遺構の推定年代	書写経典	類型
1	法界寺跡	栃木県足利市樺崎町	園池	約2000		法華経	Ⅰa
2	白根山湯釜	群馬県吾妻郡草津町湯釜	硫黄堆積中	不明		血盆経	b
3	粟崎町内	石川県金沢市粟崎町	不明	現存７		法華経	Ⅰb
4	普正寺遺跡	石川県金沢市普正寺町	旧河道	30以上	15世紀中頃以降	無量寿経？	Ⅰa
5	湯谷地内	石川県能美郡寺井町湯谷	不明	80以上	室町時代後半	法華経	Ⅰa
6	清洲城下町遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	土坑、溝	200以上		法華経	両調査共にⅠa
7	墨股廃寺	岐阜県安八郡墨俣町	不明	不明		法華経	不明
8	養老町蛇持	岐阜県養老町	池	不明		華厳経他	b
9	一乗谷朝倉氏遺跡	福井県福井市城戸ノ内町	墓地	２万数千	15世紀後半～16世紀後半	法華経	a
10	浄琳寺遺跡	滋賀県長浜市元浜町	不明	1870以上		法華経	Ⅱa
11	光明寺遺跡	滋賀県野洲郡中主町大字西河原	堀	17	14世紀末～16世紀初め	法華経	Ⅰa
12	鳥羽離宮遺跡	京都府京都市伏見区竹田内畑町	堀状遺構	16	12世紀後半	法華経他	ⅣaとⅣb
13	神倉山第三経塚	和歌山県新宮市権現山	経塚	不明		不明	不明

14	元興寺極楽坊	奈良県奈良市中院町	土坑、池	数万	15世紀～16世紀	法華経他	Ⅶb他
15	興福寺旧境内	奈良県奈良市登大路町	井戸	約290	15世紀	地蔵菩薩本願経	Ⅰa
16	八王子神社	奈良県奈良市高畑町	社殿基壇	約140		地蔵菩薩本願経	Ⅱa
17	平城京左京三条二坊十五坪	奈良県奈良市二条大路南一丁目	旧河川氾濫層	約9500	16世紀	法華経他	ⅠaとⅠb他
18	平城京左京三条三坊三坪	奈良県奈良市大宮町	旧河川	約１万	16世紀？	法華経他	ⅠaとⅠbとⅦa
19	大阪城跡	大阪府大阪市東区高麗橋一丁目	土坑、盛土層	５以上	17世紀前半	法華経他	Ⅱa
20	勝山遺跡	大阪府大阪市生野区勝山北三丁目	溝	1		法華経	Ⅱa
21	五反島遺跡	大阪府吹田市南吹田5丁目	旧河道	1	南北朝期	法華経	b
22	高槻城跡	大阪府高槻市野見町	堀	20	16世紀前半	法華経	Ⅰa
23	上清滝遺跡	大阪府四条畷市清滝	旧河川	1		法華経	Ⅲ
24	書写坂本城跡	兵庫県姫路市書写西坂本	堀	5	15世紀	法華経	a
25	草戸千軒町遺跡	広島県福山市草戸町	池、溝	10以上	室町時代	法華経	両調査共にb
26	井相田C遺跡	福岡県福岡市博多区井相田二丁目	池	4200	15世紀中頃を下限	法華経	ⅠaとⅠbとⅤb
27	大宰府史跡	福岡県太宰府市大字観世音寺	溝	5	14世紀？	法華経	Ⅰb

表２　柿経発見地一覧

番号	発見地	所在地	発見場所	発見点数	書写経典	類型
1	立石寺	山形県山形市大字山寺	石窟	１万以上	無量寿経他	ａとｂ
2	中尊寺	岩手県西磐井郡平泉町	金色堂須弥壇下	不明	阿弥陀経他	
3	浄楽寺	神奈川県横須賀市芦名	阿弥陀如来坐像	128		
4	覚園寺	神奈川県鎌倉市二階堂	開山塔下	不明	阿弥陀経他	Ⅰｂ
5	石川県内某寺	石川県能美郡			法華経	Ⅰｂ
6	愛知県佐屋町	愛知県海部郡佐屋町	不明	不明	法華経	a
7	石山寺	滋賀県大津市石山寺辺町	淳祐内供像	32	不明	
8	元興寺極楽坊	奈良県奈良市中院町	天井裏	約27000	法華経他	Ⅰa、Ⅲb他
9	東大寺	奈良県奈良市雑司町	金剛力士像、獅子像	断片	法華経	b
10	西大寺	奈良県奈良市西大寺町	奥院骨堂内	1400以上	法華経	Ⅱa
11	不退寺	奈良県奈良市法蓮東垣内町	本堂天井裏	6389	法華経他	ⅠbとⅡa
12	円成寺	奈良県奈良市忍辱山町	本堂	41	法華経	Ⅵa
13	松尾寺	奈良県大和郡山市松尾	本堂床下	146	法華経	Ⅰｂ
14	岩蔵寺	奈良県生駒市南田原町	毘沙門天像胎内		毘沙門天王功徳経	Ⅵａ
15	大御輪寺	奈良県桜井市三輪町	堂内	不明	法華経他	
16	当麻寺	奈良県北葛城郡当麻町	本堂	91	称讃浄土摂受経	Ⅰｂ
17	室生寺	奈良県宇陀郡室生村	須弥壇下	3	不明	不明
18	金峰山寺	奈良県吉野郡吉野町	二王像胎内	5000以上	法華経と般若理趣経	Ⅰa、Ⅰb他
19	慈眼院	大阪府泉佐野市日根野	本堂天井裏		法華経	b
20	金山寺	岡山県岡山市金山寺	五重塔須弥壇		法華経	b

V　編年

柿経は前述したように、各地で出土例が増加しているが、すべての柿経の製作年代を共伴遺物から比定するのは問題がある。なぜなら柿経廃棄のケースには、供養（製作）直後に廃棄した場合と、墓堂・寺院などに奉納したのち廃棄した場合の二通りが考えられ、共伴遺物は廃棄された時の同時性を示しているにすぎないからである。前者の場合、柿経の製作年代の下限は共伴遺物からある程度比定できるが、後者の場合だと、元興寺極楽坊天井裏での発見資料のように、数百年にわたって寺院に安置されている例もある。しかし、柿経のなかには少数であるが紀年銘を有するものがあり、これらの柿経の時代的特徴を明らかにし、指標とすれば、編年・製作年代の比定を行なっていくことができると考える。

紀年銘を有する柿経は18例ある（表３）。なお、なかにはまとまって発見できず、１点あるいは断片であるため、柿経か笹塔婆かの区別が難しいものもあるが、ここではそれらもあわせて紹介しておく。

表３　紀年銘をもつ柿経一覧表

番号	紀年銘	発見地	長さ	幅	厚さ	類型	写経経典	備考
1	嘉禄元年（1225）	元興寺極楽坊本堂天井裏	(13.5)	1.0	0.5	Ⅰb	法華経	表面がささくれだち、手割であることをうかがわせる
2	嘉元四年（1305）	元興寺小子房及び包蔵坑の調査	25.0	1.6	0.5	Ⅰb	地蔵菩薩本願経	この年号は、書写した経典の刊記を写したもの
3	正慶元年（1332）	覚園寺開山塔下			0.4	Ⅰb	阿弥陀経	
4	明徳四年（1393）	石山寺淳祐内供像胎内						
5	明徳四年（1393）	元興寺小子房及び包蔵坑の調査	25.3	1.4	0.5	Ⅶb	般若理趣経	
6	応永六年（1399）	元興寺収蔵庫建設に伴う調査	24.7	1.4	0.5	Ⅰb	千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経	
7	応永六年（1399）	元興寺極楽坊本堂天井裏	(22.7)	1.3	0.5		不明	
8	応永十五年（1408）	元興寺小子房及び包蔵坑の調査	16.7	2.1		Ⅶ		
9	応永二十七年（1420）	東大寺獅子像胎内	25.8	1.5		b	法華経	
10	永正十三年（1516）	松尾寺本堂床下					法華経	
11	天文（1532―1554）	元興寺収蔵庫建設に伴う調査						
12	天文八年（1539）	元興寺極楽坊本堂天井裏	(9.4)	(1.9)	0.4	a	不明	
13	天正八年（1580）	元興寺小子房及び包蔵坑の調査	(9.3)	2.8	0.3		不明	
14	正保三年（1646）	不退寺本堂天井裏	33.0	3.2	0.4	Ⅱa	法華経	こけら経束の側面に年号を墨書
15	慶安二年（1649）	不退寺本堂天井裏	36.0	3.5	0.35	Ⅱa	法華経	こけら経束の側面に年号を墨書
16	寛文五年（1665）	浄楽寺阿弥陀如来坐像胎内	26.1					
17	元禄十三年（1700）	西大寺奥院骨堂	36.9	3.8		Ⅱa	法華経	
18	正徳元年（1711）	岩蔵寺毘沙門天像胎内	29.6	5.8		Ⅵa	毘沙門天功徳経	

以上の紀年銘資料に加えて、遺構から出土し、共伴土器などから編年作業の基礎資料となると考えられるものを補足して、形態と写経方法から、柿経の変遷過程をみていくと、次のように大きく4時期に区分できる。以下に各時期の特徴と概要を述べていく。

Ⅰ期　最古の柿経の型式は、鳥羽離宮遺跡出土資料にみられるⅣa、Ⅳc類である。前述したように、柿経の製作年代は共伴土器から一概に決めることはできないので12世紀後半の土器と共に出土したこの資料は、下限が12世紀後半であるとしか言えない。しかしそれでもこの資料は、現存最古のものであることは疑いないと思われる。この時期の柿経は、深い切込みのはいる圭頭状で、下端部を尖らせ、一塔同字写経を行う点が特徴である。下端部が尖っているのは、藤澤氏が指摘するように墓上に挿し立てるためであろう。[62] 写経供養をした後、墓上に立て並べているのであるから、この頃の柿経は写経と造塔という功徳概念どおり行われていたことがわかる。なお、寿永三（1184）年銘の題籤軸とともに出土した柿経が上清滝遺跡から出土しているが、旧河川から出土しているため良好な出土資料と考えることはできず、除外した。

Ⅱ期　嘉禄元（1225）年銘、正慶元（1332）年銘、明徳四（1393）年銘、応永六（1399）年銘資料が指標となる。Ⅰb類、Ⅶb類がある。この時期の柿経は、頭部が圭頭状、五輪塔状になり、下端部が平らで幅が狭く、両面写経を行う点が特徴である。また表面はささくれだち、厚さも均一化していないことから、手割で作られたことがうかがえる。Ⅰ期で下端部を尖らせ、一塔同字写経をしていた柿経が、Ⅱ期になると下端部が方形になり、両面写経を行うようになるのは早くも造塔の概念が軽視され、写経の概念が重要視されてきたことをあらわすものであろう。藤澤氏は、柿経の下端部が方形になるのは13世紀後半頃、石組墓が高さを減じ、石組の間を小礫で埋めるようになり、挿し立てる平面空間がなくなったことに起因するものと考えている。[63] また現存する頭部五輪塔状のⅦ類の柿経は明徳四（1393）年銘のものが最古であるが、文献資料によると『僧聖舜寄進田畠置文』[64] の嘉禎元（1235）年12月28日の条に「造刻五輪卒都婆、法花経一部八巻、一日内可レ被レ書二写供養二分経之定一二」の文言があり、この文言から五輪塔形の柿経に法華経を一日で書写することは13世紀前半にはあったことがうかがえる。

Ⅲ期　この時期の良好な紀年銘資料は無く、天文八（1539）年銘の片面写経のものが発見資料としてあるが、指標となるのは15世紀中頃が下限となる井相田C遺跡池状遺構内出土資料と15世紀後半が下限となる興福寺賤院地区井戸内出土資料である。前者にはⅠa類、Ⅰb類、Ⅴb類が、後者にはⅠa類、Ⅰb類がある。この時期の柿経は片面写経の柿経の出現と、両面写経と片面写経の両方があることが特徴である。またⅡ期の柿経に比して厚さが薄くなり、厚さが均一化し、表面がなめらかのものが多くなる。このことは田中氏が15世紀中頃にカンナに類する道具ができたため、手割製作から削り出し製作に変わったた

めであろうとしている。[65] また前述したように元興寺極楽坊の柿経の研究によると、両面写経から片面写経に変わるのは、1450年を前後する頃と推定している。地域的な時期差もあろうが、この時期に両面写経から片面写経に移行していったことが仏教史学的にも考古学的にも裏付けられ、井相田C遺跡、興福寺賤院地区出土資料はやはり両面写経から片面写経への移行期の所産であることがわかる。Ⅲb類には紀年銘資料など年代を推定する資料はいまだ無いが、両面写経である点を考えると、Ⅱ期かⅢ期のものと考えられる。Ⅶa類についても年代推定に有効な資料は無いが、片面写経、幅が狭いことを考えると、Ⅲ期のものと考えられる。

Ⅳ期　正保三（1646）年銘、慶安二（1649）年銘、元禄十三（1700）年銘、正徳元（1711）年銘資料が指標となる。Ⅱa類、Ⅵa類がある。この時期の柿経は全段階の中で最も長さ、幅が大型で、頭部五輪塔状のものは無く、片面写経のものしかみられない。また厚さは薄く、均一化しており、表面が滑らかな点も特徴である。この時期の柿経の、大型化、厚さの均一化、表面仕上げが滑らかになるなどの特徴は、ダイガンナの改良など経木製作に於ける製作工具の改良が大きな要因であろう。

以上の時期に年代をあてるとⅠ期は上限は明かではないが12世紀後半が下限、Ⅱ期は13世紀前半から14世紀後半、Ⅲ期は15世紀前半から16世紀後半、Ⅳ期は17世紀前半から18世紀前半となる。これら写経方法の変化は、宗教的要因だけでなく、経木の製作法が手斧などによる割り剝ぎ技法から、ダイガンナなどによる削り出し技法に変わることにより、簡易かつ大量に作られるようになったという技術的要因が大きいと考える。

以上、柿経の編年について検討してきたが現状では資料的制約があるため、不明な点も多い。しかし今後の資料の増加によっても、上記の編年案は大きく変わらないものと考えている。前述の事実関係をまとめ、整理して結果が表4である。

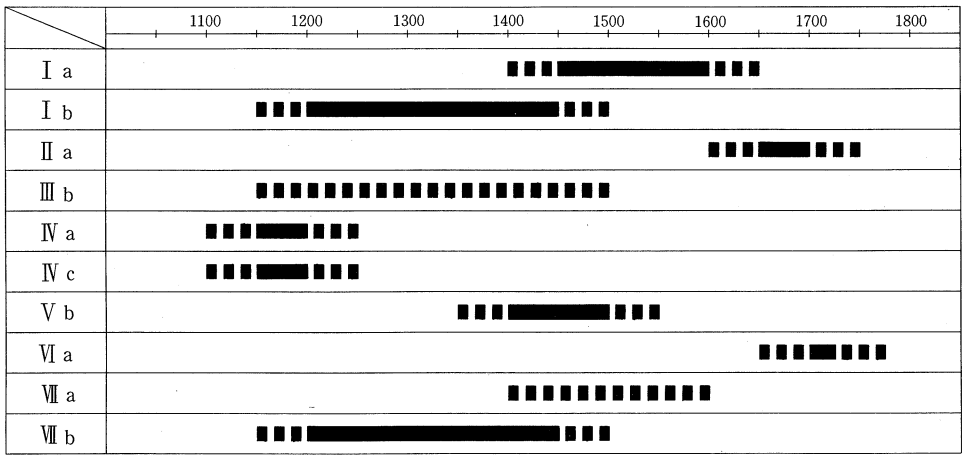


表4　柿経編年表

V　おわりに

本稿では、柿経の出土・発見遺例を紹介するとともに、分類・編年について検討してみた。

最後に今後の課題を述べ、若干の考察を加える。

まず第一に柿経の廃棄（供養）の問題である。表2にみられるように、柿経の出土地点は河川や池など水辺に関係するものが多いことである。このことについて奥野氏は、『百錬抄』第九安徳天皇の養和元（1181）年10月11日の条「於レ院書二柿葉於心経千巻一供養。納二俵十二一。為レ被レ入二東海西海一也。」の文言から「柿経の入水供養」とも言うべき供養形態があったのではないかと想定している。[66] また戸澗氏は、粟崎町出土の柿経を例にあげ、利害相対立する境界（河川など）に柿経を埋納する呪儀があったことを想定している。[67] しかし現在のところ河川や池などから出土している柿経は、特に水に流して供養したのではなく、単に時間的経過によって寺院や堂内に柿経を安置する場所が無くなったために河川などに投棄したものと考えている。なぜならば、柿経は造塔と写経の功徳を一度に得るためのもので、製作すること自体に意義があるものであったと考えるからである。河川や池・井戸などからの出土例が多いのは、木製品である柿経が遺存しやすい状況であったからとも考えられる。また奥野氏は前述の『百錬抄』の記述が他の柿経史料には無いことから、特殊な事例としてとらえることもできると述べている。[68] 以上のことから柿経を廃棄する地点は特に限定されていなかったのであり、境界に埋納するという呪儀があったとしても、二次的な供養法であったと考える。

次の問題点は柿経の製作技法である。平城京左京三条三坊三坪の調査出土の五輪塔形のものを観察する限り、外形が重なり合うものがいくつか見受けられた。このことは、五輪塔形の柿経を製作する場合、経木を一枚一枚五輪塔形に切ったのではなく、五輪塔形にした板を薄く削って製作したということが考えられるのである。このような視点にたって、束状となって出土・発見された例について、製作技法の検討が必要であると思うが、その点については、また別の機会に論じることにして、本稿はひとまず筆をおくことにする。

なお本稿をまとめるにあたっては、㈶元興寺文化財研究所　藤澤典彦、松村圭崇、㈶京都市埋蔵文化財研究所、奈良大学　木下密運、吹田市教育委員会　増田真木、野々市町教育委員会　田村昌宏、奈良国立文化財研究所　寺崎保広、不退寺住職　松村圭淳、奈良大学学生　河岸美幸、上原康子各氏に御教示、御助言、御協力いただいた。記して感謝したい。

註

1）　「鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度」　京都市文化観光局　京都市埋蔵文化財研究所　1988

2）　「元興寺極楽坊総合収蔵庫（第一収蔵庫）建設報告書」　元興寺極楽坊　1965

3）　奈良新聞朝刊　平成５年１月29日号　1993

4）　石田茂作　「元興寺極楽坊発見の柿経」　『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究』　『仏教考古学論巧三』　1964

5）　奥野義雄　「中世仏教信仰におけるこけら経の存在形態」　『元興寺仏教民俗資料研究所年報第八冊』　1974

6）　「日本仏教民俗基礎資料集成　第六巻」　中央公論美術出版　1975

7）　藤澤典彦「墓上祭祀の諸問題」　『月刊歴史手帖19-11』　1991

8）　戸澗幹夫　「加賀出土こけら経」　『石川県立歴史博物館紀要　第五号』　1992

9）　「法界寺跡発掘調査基本計画書」　足利市教育委員会　1992

10）　6）に同じ

11）　8）に同じ

12）　「普正寺遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター　1984

13）　8）に同じ

14）　「木簡研究第九号」　木簡学会　1987および「木簡研究第十二号」　木簡学会　1990および「清洲城下町遺跡（Ⅱ）」　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1992

15）　6）に同じ

16）　6）に同じ

17）　「特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅤ　昭和58年度発掘調査整備事業概報」　福井県朝倉氏遺跡資料館　1984

18）　「木簡研究第九号」　木簡学会　1987

19）　「木簡研究第十四号」　木簡学会　1992

20）　1）に同じ

21）　6）に同じ

22）　2）に同じ

23）　6）に同じ

24）　2）に同じ

25）　6）に同じ

26）　6）に同じ

27）　6）に同じ

28）　2）に同じ

29）　18）に同じ

30）　「奈良市高畑町八王子神社出土懸仏」『三郷町　平隆寺　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四十七冊』　奈良県立橿原考古学研究所　1984

31）　「平城京左京三条二坊」　奈良国立文化財研究所　1975

32）　「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成４年度」　奈良市教育委員会　1993

33）　「木簡研究第十号」　木簡学会　1988および「大阪城跡発掘調査概要４　図録大坂城跡の調査

2」　大阪文化財センター　1992

34)　「木簡研究第十三号」　木簡学会　1991

35)　「木簡研究第十二号」　木簡学会　1990

36)　19）に同じ

37)　35）に同じ

38)　「木簡研究第十号」　木簡学会　1988

39)　「草戸千軒町遺跡―第三二次発掘調査概要―」　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1985および「草戸千軒町遺跡―第三三次発掘調査概要―」　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1986

40)　「福岡市埋蔵文化財調査報告書　第179集　井相田Ｃ遺跡Ⅱ」　福岡市教育委員会　1988

41)　「大宰府史跡　昭和63年度調査概報」　九州歴史資料館　1988

42)　4）に同じ

43)　「日本仏塔の研究」　石田茂作　講談社　1969

44)　「金峯山寺二王像像内品民俗資料緊急調査報告書―印仏・こけら経―」元興寺文化財研究所　1980

45)　44）に同じ

46)　8）に同じ

47)　6）に同じ

48)　44）に同じ

49)　6）に同じ

50)　48）に同じ

51)　「西大寺骨堂遺物」　元興寺仏教民俗資料研究所　1970

52)　「不退寺こけら経民俗資料緊急調査報告書」　元興寺仏教民俗資料研究所　1977

53)　「忍辱山円成寺　菩提山正暦寺中世信仰資料調査報告　元興寺仏教民俗資料研究所年報1967」元興寺仏教民俗資料研究所　1967

54)　4）に同じ

55)　3）に同じ

56)　「法隆寺舎利殿　松尾寺本堂発見仏教民俗資料緊急調査報告書」　元興寺仏教民俗資料研究所　1974および4）に同じ

57)　「當麻寺民俗資料緊急調査報告書」　元興寺仏教民俗資料研究所　1972

58)　「室生寺叡塔の研究」　中央公論美術出版　1976

59)　48）に同じ

60)　6）に同じ

61)　6）に同じ

62)　7）に同じ

63)　7）に同じ

64)　「勝尾寺文書」第135号文書（『箕面市史・史料編Ⅰ』所収）

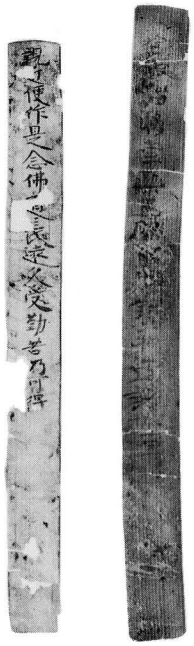
65)　田中信清　「経木」　法政大学出版局　1980

66)　5）に同じ

67)　8）に同じ

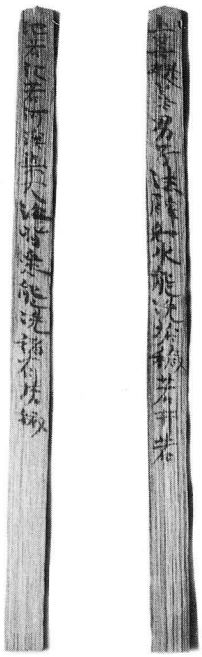
68)　5）に同じ

図版1　様々な柿経

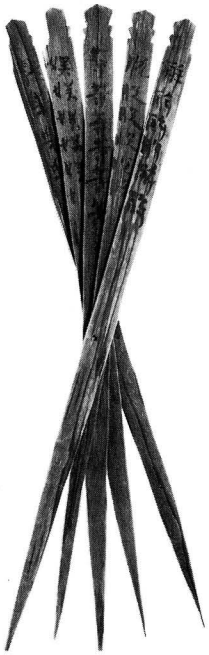


1. Ⅰb類(平城京左京三条三坊三坪)

2. Ⅱa類(不退寺)



3. Ⅲb類(不退寺)



4. Ⅳc類(鳥羽離宮遺跡)

5. Ⅶa類(平城京左京三条三坊三坪)

6. 整巻状態(不退寺)

図版2　紀年銘を記した柿経

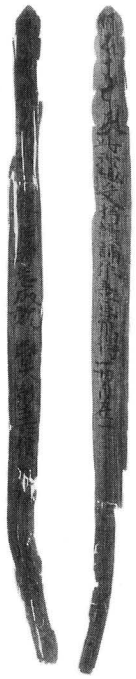
1. 嘉禄元年銘（表）

2. 嘉禄元年銘（裏）

3. 嘉元四年銘（表）

4. 嘉元四年銘（裏）

5. 明徳四年銘（左・表）



6. 明徳四年銘（左・裏）

7. 應永六年銘（表）

8. 應永六年銘（裏）

奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

1992

平成5年3月25日　印刷
平成5年3月31日　発行

発行　奈良市教育委員会
奈良市二条大路南1丁目1番1号

印刷　関西美術印刷株式会社
奈良市西木辻八軒町153—1